川福小論文　2014.11 No5

現代は科学の発達によりあらゆるものが人工的にコントロールされている時代だと思います。クローン技術もその１つです。

クローン技術とは、遺伝的に同一な個体を人工的に作り出す技術のことです。ジャガイモを種イモから栽培したり、チューリップを球根から育てたりするのも遺伝子的には同じなのでクローン技術です。動物の分野では、１９９６年に羊、１９９７年には牛（「のと」と「かが」）のクローンが誕生しています。これらは同一の品質と大量生産を可能にするため、ビジネスと結びついています。

このままクローン技術が発達すると何が起こるのでしょうか。絶滅の危機にある動物を増やすことができるでしょう。また、人間の失った機能の回復のための再生医療にも応用されるでしょう。そして、その延長線上に人間そのものを作り出す「ヒトクローン」が議論されるかもしれません。

日本では、ヒトクローンの製造は法律で禁止されています。しかし、人間が「都合のいい世界」を求めれば求めるほど、拒絶反応がないので臓器移植がしやすいとか、不妊の解決につながるなどの理由で医療分野での需要が高まり、いつかヒトクローンが容認されるかもしれません。しかし、クローンも人間である限り、権利や人格を持っています。他の人間の都合に合わせて利用される動物ではありません。

私は人々が暮らしやすい「便利な世界」が広がることには賛成です。確かに、一個人、現時点という狭い視点で見ると「都合のいい世界」も「便利な世界」も同じに見えます。しかし、未来の世代や社会の多様性という広い視点で見ると「都合のいい世界」と「便利な世界」はまったく反対の意味になります。私は、クローン技術について未来の世代や人間と社会の多様性を守るために人間には応用しないという原則を確かめながら、社会をより便利にするために発達させるべきだと考えます。